



思文閣出版
2,940円(税込)

新島襄の交遊

— 維新の元勳・先覚者たち
— 新島の元勳・先覚者たち
本井康博 (大学神学部教授) 著

本書は、新島と時代を共有した明治維新・明治前半期の元勳や先覚者たちとの交遊の跡を具体的に解明した研究書である。各個々人の研究サイドから見ても、従来の研究の手薄さを補うに余りある研究書だ、との新鮮な驚きを感じてしまうのは、私だけではないだろう。

本書では、留学・岩倉使節団関係者として伊藤博文・木戸孝允・大久保利通・田中不二麿・森有礼・富田鉄之助の6人、同志社開校関係者として山本寛馬・九鬼隆一・明治天皇・公家・西郷隆盛・横井小楠の5人余、同志社大学設立運動関係者として土倉庄三郎・板垣退助・

勝海舟・陸奥宗光・大隈重信・井上馨・青木周蔵・三島弥太郎・金子堅太郎・福澤諭吉の10人、合計21人余が福澤論吉の10人、まさに、元勳や先覚者として著名な者ばかりで、宗教界や同志社関係以外に、政界・官界・財界の各分野に幅広く及んでいる。

このように、実質10余年位の新島の活躍期間にもかかわらず、交遊範囲が思いのほか広く、人によっては実に深い交流があったことが明らかにされている。これは、関係者との交遊の日々を、自伝や伝記に止まらず、近年刊行されている各書簡集等から丹念に博采することによって、即ち、ナマの第一次史料を引用して微細に論究することに努めているために、双方の関係の親密な息づかいや交流の裏のウラまでを読む者に垣間見せてくれるからである。読者は、謎解きのパズルを一枚一枚剥がしてくる著者の手法に感嘆の声すら挙げてしまうだろう。佐藤能丸(早稲田大学政治経済学部講師)



晃洋書房
2,520円(税込)

『科学』を超えて

— 自然・人間・心の風景

山下正和 (大学工学部教授)
西村理 (大学経済学部教授)
原誠 (大学神学部教授) 著

本書は2002年度に実施された学際科目の講義録である。

工学部の山下正和教授と神学部の原誠教授が入試出張の際、サッポロ・ビール園で語り合ったことが契機となり、後に経済学部の西村理教授も参加されたこの学際科目が誕生することになった。だからであろう、語り口も内容も自由闊達、じつに楽しく読め、次第に問題意識の共有へと誘われていく。

本書のユニークさは、まず特定の対象が設定されていない点にある。学際科目といえ、問題の領域や対象を明確に定め、



和泉書院
21,000円(税込)

『源氏小鏡』諸本集成

〈研究叢書325〉

岩坪健 (大学文学部教授) 編

源氏小鏡とは源氏物語梗概書の一つで連歌寄合(連歌を詠む時の付合い手引)の記述が含まれていることから、14世紀頃に二条良基の周辺で作成されたか、とされているものです。

良基以来、源氏物語は連歌師にとっても必読の教養書となりましたが、54帖の写本を入手することの困難な時代にあつて、全巻読破しなくとも全貌のわかる極めて簡便な実用書ということで、源氏小鏡は連歌師のみならず、広く世間に流布してゆきました。

しかし実用書ということもあってでしょう、多種多様に生産

され、再生産されていったため、伝本の数も多く、諸本間の本文異同も夥しいのです。

源氏小鏡の諸本については、先に伊井春樹氏が60本の伝本調査を踏まえて六系統論分類説を提唱していますが、岩坪氏は精力的に新たな資料を掘り起こし、六系統論に修正・追加を加えた系統分類を提示(氏の系統論の緻密さは仙源抄・類字源語抄その他でも定評があります)、更にその一つひとつについて最適と思われる本文を選び、翻刻紹介をしています。

源氏小鏡では本来の源氏物語とは異なった奇妙な粗筋が紹介されることもままあり、和歌・連歌・謡曲・中世王朝物語等の中世文芸に与えた影響は甚大だとされています。

どうぞ皆さま、本書を手がかりに、中世源氏物語の豊穡な世界を心ゆくまでご満喫ください。

上野英子(実践女子大学文学部助教授)



ミネルヴァ書房
6,300円(税込)

古代ギリシア史における帝国と都市

中井義明 (大学文学部教授) 著

オリンピックの起源。民主主義の発祥地。古代ギリシアという言葉を聞いたときに、すぐに思い浮かぶのはこのようなことではないだろうか。今に伝わる遺跡のすばらしさのためか、古代ギリシアという世界は理想的な世界という印象を持たれやすいのかもしれない。

しかし、本書が対象にしているのはこのような理想的なギリシアではなく、勝れて現実主義的な人々が各自の利害のために動いていたギリシアである。長い歴史を通して一度も統一されることのなかった古代ギリシア人は、ポリスと呼ばれる都市国

個別専門家の協力によって行われる場合が多い。しかしここでは、科学を超える領域という広大な視野が想定されている。科学には限界があり、科学万能という固定観念から脱却しなければ、人類は真の意味で生きていくことはできないという危機意識が根底となっているからだ。

また、特定の学際研究の成果を教え込もうとしない点もユニークである。学生自身が生きる意味や共に生きることを主体的に考え、行動するように努めてほしいという願いからだ。

3人の担当者は異分野間の対話の面白さ、大切さを自ら味わうことから出発した。その結果、共同の知的作業を楽しむという思わぬ成果も得られたという。従来の科学の枠組みを超えて、未知の知を大胆に探求する道を教員・学生が共に歩んでいくことは、新島襄の志した「自由教育」を継承発展させていく貴重な方法である。賢者たちのさらなる活躍を心から期待したい。

野本真也(理事長・大学神学部教授)

家を基本単位にして動いていたと言われる。これに対し著者は、古代ギリシアの世界を動かしていたのは党派であると主張する。そして、各ポリスの動向は、当時有力であった党派の動向を反映していたに過ぎないと。

自身の利害に合致する党派に属していた人々は、その党派を足掛りに、時にはその党派すらも超えて、非常に活発な活動を行った。古代ギリシアの強力なポリスであったアテナイとスパルタは、それぞれが他のポリスを支配する帝国を形成するに至るが、これらの動きも突き詰めれば党派の利害を反映したものであった。さらに、彼らの活動は当時の超大国であったペルシア帝国をも巻き込んで展開していったのである。

本書を通じて読者は、我々が陥りやすいステレオタイプとは大きく異なる古代ギリシア人の姿を見ることができるよう。

森田純司(大学文学部研究科博士課程)



知泉書館 8,400円(税込)

エックハルト ラテン語著作集I ―創世記註解／創世記比喩解 エックハルト著 中山善樹(天文学部教授) 訳

本書は、「エックハルト ラテン語著作集」全五巻の一つで、昨年上梓された第二巻に続くものである。中山善樹教授はエックハルト研究の文字通り第一人者であり、この浩瀚な訳業にはとくに心血を注いで来られたが、全体が完成した暁には、西洋哲学の古典の我が国における訳史上、まさに金字塔となるであろう。

言うまでもなくエックハルトは、中世哲学の精華とも呼ぶべき巨大な存在であって、古代・中世の哲学・神学の全伝統は一

度びエックハルトに取鏡し、比類なき仕方であらわしている。ちなみに往時、一般民衆のために為されたドイツ語訳は、確かにこの真相を直截に語り出して、興味あるものであるが、ラテン語著作の方は遙かに学的な奥行きが深く、後世の容易に凌駕し得ぬ大きな知的源泉であると言えよう。とくに本書は、存在(＝神の名)、創造、時間、そして人間の成立などについての根本的な洞察に満ち、専門家にとつてのみならず、およそ真に自己と人生を問うすべての人々にとつて、すぐれて範となるべき稀有な作品である。そして訳語は、精確で達意の文章であり、虚心に心開いて熟読玩味するならば、必ずや心の糧となり、また人生の指針ともなるであろう。見事な解説、簡にして要を得た訳註と相俟って、全体として本書が、我が国の学界に、そして広く世に寄与するところ、まことに大であると思われる。

谷隆一郎(九州大学文学部研究教授)



思文閣出版 13,650円(税込)

文化史学の挑戦

笠井昌昭(天文学部教授) 編

編者の巻頭論文を含めて所載論文数40、総頁数670余、浩瀚である。加えて表題に「文化史学」という一つの主張をもつた立場を示し、さらに「挑戦」という穏やかならざることばを重ねている。質量とも存在感にあふれた書物である。

本書は、笠井昌昭教授の定年退職を契機として成った論文集である。論者には幾人かの教授の「畏友」の方々も加わってはおられるが、その大半の人たちは濃淡があるものの教授の教えを受けた人、つまり弟子筋の人たちである。その年齢層は30代から50代に及び、職業も様々で、それぞれの分野で研究者として世に立っている。したがって本書には「笠井文化史学」の歴史

と広さが示されていることになる。しかし論述の方法・内容は決して様ではない。教授自身も述べているように文化史学は「それぞれに独自の文化史観」をもつものであるのだから、それも当然である。したがって本書はまた「笠井文化史学」への「挑戦」ということもできるのである。

各論は「美術の深相」「文化の諸相」「歴史の真相」の3部に分かれていた。対象も様々であり、時代も古代から近代にまでわたり、分野も広い範囲に及んでいる。個々の論文は独立的であり、それぞれが研究史に寄与しているものであるが、それでも歴史の感覚に似通ったところがあると思うのはおそらく私だけではないであろう。「文化史学」のまとまった成果として本書が成った意味は小さくないと思われる。外に向けての主張と内での葛藤という二重の「挑戦」が本書の、そして「文化史学」の魅力となつていて、これを痛感させてくれる論文集である。

露口卓也(文学部教授)



NHK出版 1,575円(税込)

ぼくの考古古代学

森浩一(天文学部教授) 著

ゴホウラ・イモガイ・ヤコウガイ・イルカの頭骨(脂利用)・硬玉翡翠といった具体的な出土遺物によって縄文人の広域行動や交易の実態が明らかにされてゆく。構築材の運搬技術、工法のレベルの高さも示される。よって、縄文時代に付されていた「原始」とか「未開」といった概念が消されてゆく。三角縁神獸鏡の盛行と衰退から神仙思想と仏教思想の関係を読解する。そして、減筆(画教省略文字表記)の慣行から仮名の発生を推測する。―思つてくひまもない。

森氏はこの書に『ぼくの考古

古代学』と名づけているのだが、内容には、古代から現代に向けられた発信とともに、現代から古代を照射する矢印も見られる。双方向的な発想はじつに柔軟で、本書には新しい文化分析法が示されている。本書に取められている最もユニークな資料は、1981年1月から2001年12月までの21年間にわたる著者自身の食事内容の克明な記録である。魚介類・海藻類・野菜・穀類・豆類など、食材の種類は21年間で437種類に及んでいる。この膨大な記録は、考古古代の「食」に対して、より計量可能な形で現代から光を当ててみようとする著者の情熱に支えられて成ったものだ。

森文化史学は、厳正な考古資料分析・文献の深い読解・実地踏査と環境観察を鼎の足としており、鼎の重量と大きさは、飽くなき探究心によって増大を続けつつある。

野本寛一(近畿大学文学部特任教授)



法律文化社 4,935円(税込)

都市同郷団体の研究

鯉坂学(天文学部教授) 著

著者と私は、故松本通晴大学文学部教授ゼミの出身である。同ゼミ関係者により一九九四年に『都市移住の社会学』を上梓した。これは松本先生の遺作となった。今回の著作は、著者独自の視点からそれを発展的に継承したものといえよう。

その後私は地域経済論・地域政策論を専攻している。経済学の分野では集積の問題について多様な議論が展開されている。人はなぜ都市に集まるかというと外部性が働くからである。あるいは形式知と暗黙知との高密度の交流を通じて新たな知識が生まれるからだといえる。

ところがMITの経済学者、

レストラー・サロー教授は経済学的要因を偏重することに注意を促している。「人間は本来、群れる動物であり、他人と交わって生きることを好む」という社会の本質をもっと尊重すべきではないかという。

経済学の問題に限定せず社会の本質を研究しようとするのが社会学の役割である。本書は、大阪や尼崎における事例調査などを通じて同郷団体の諸相、つまり集積の過程と実態を探求したものである。著者の関心はさらに海外におけるエスニック・グループにまで広がっている。著書の表紙をせひ手にとつてみてほしい。阪神淡路大震災直後に被災地を歩いた著者が自ら撮影した写真である。廃墟の中にぼつんと残った神戸電美会の建物に「君も僕もゼロから出発だ」という垂れ幕がみえる。この写真から経済学的理由だけでは説明できない生命のにおいのようなものが伝わってくる。

伊藤敬安(広島大学地域経済システム研究センター長・教授)



文眞堂
3,150円(税込)

専門職の転職構造

組織準拠性と移動

藤本昌代 (社会学部助教授) 著

本書の問題意識は極めて単純素朴であり、それゆえに極めて重要なものである。著者はある大手メーカーの従業員への大規模な調査によって興味深い事実を発見した。それはエンジニアの方が、その他の事務職等の従業員と比べて組織への帰属意識が強い、ということである。これは従来、エンジニアはその専門性に忠実であるがゆえに組織への帰属意識は希薄であり、そのためにコスモポリタンの特性を持つ、とされてきたことから理解しがたい事実である。そこで著者は同じ産業で規模の小さなメーカーと国立系の研



講談社現代新書
777円(税込)

アメリカ外交

苦悩と希望

村田晃嗣 (大学法学部教授) 著

冷戦に「勝利」した、唯一の超大国、米国。9・11の同時多発テロ以後、ジョージ・W・ブッシュ現政権は、アフガニスタンやイラクに対する戦争開始から、国連軽視、単独行動主義、米国Ⅱ帝国など、世界の非難を浴びてきた。

こうした、いわば米国断罪論に対し、本書は、①ウォルター・ミードの4つの類型(ハミルトン、ジェファソン、ウィルソン、ジャクソン)を援用し、②国際システム、国内政治、個人の3つのレベル、③力、富、価値のパワーの3つの構成要素を視野に入れて分析し、一部の批判はその妥当性を欠いている

究所とを比較の対象として同様の調査を試み、前者では組織への帰属意識が低く、後者では一層高いことを見出した。著者の独自性はこの事実を如何に解釈するか、というところに発揮される。著者は日本における科学と技術(主として企業によって担われる)との関係が高低と意識されていること、今ひとつは転職の可能性の有無、という二つの軸から、「ローカル・マキシマム」という卓抜した概念を紡ぎだした。つまり、民間企業研究所に対しては「低」に位置づけられるが、同じ民間の業界内では「高」に位置づけられるという意味で彼らは「ローカル・マキシマム」であり、転職可能性の低さも相俟って組織への帰属意識を高める、というのである。

素朴な疑問をロジカルに、また実証的に論証する著者の力は端倪すべからざるものである。

服部民夫 (東京大学教授)

と明快に主張する。好著である。本書は、建国期から現在までの米国外交を歴史的に概観しながら、安易にレッテルを貼る「皮相的な」米国外交を米国外交の歴史的背景から、より複合的、重層的に捉え、米国自身が超大国にどう向き合えばいいか、呻吟している状況を現実主義的に理解し、日本を含む他国は、保守性と革新性、開放性と閉鎖性、権力の分散としての三権分立、多民族性など、多様性と矛盾に満ちた「民主国」米国外交を国際協力へと具体的に誘導すべきであると、歯切れよく主張している。

米国外交に関心を持つ読者は巻末の参考文献とともに、たとえば藤原帰一「デモクラシーの帝国」、西崎文子「アメリカ外交とは何か」(いずれも岩波新書)、佐伯啓思「新「帝国」アメリカを解剖する」(ちくま新書)などと読み比べれば、本書の論点がより鮮明になるであろう。

細谷正宏 (大学アメリカ研究科教授)



日本図書センター
2,310円(税込)

アメリカ日本人移民の越境教育史

吉田 亮 (社会学部助教授) 編著

「越境史」とは、一国内部のみを見る国史研究への批判から台頭した研究領域である。本書は、渡米した日本人移民たちの教育の越境史なのだが、アメリカ研究、異文化間教育、国際理解教育や移民学などの専門家が越境教育に切り込み、越境の体験が豊かなりアリティをもつて語られると共に、複数の学問領域間の越境と協働の成果が提示されている。

序論では、分析枠組みが示される。地理的越境、政治的越境と文化的越境の中で、教育拠点の「脱領域化」、アメリカ化運



同文館出版
3,150円(税込)

ランドマーク商品の研究

商品史からのメッセージ

石川健次郎

(大学商学部教授) 編著

「携帯電話をけながら運転しているドライバーを車の中に発見した歩行者が、奇妙な感覚に襲われる」のはなぜか。

私たちは望むと望まざるとにかかわらず、商品による生活様式の変容に巻き込まれることがある。

本書では、生活様式に画期的な変容をもたらした商品を「ランドマーク商品」と名づけ、その生成プロセスを論じている。

何をもち「ランドマーク」とみなすかについて、読者の関心は集まるであろうが、操作可能な形で概念規定はなされてい

動、同化や排斥とのせめぎあいなどの重要なプロセスが展開し、ダイナミックな相互作用を及ぼしあっていく。各論では、19世紀末日本人書生の越境教育、公立学校分離教育、日本語教育、沖縄県の移民教育、日本見学団、日本の移民教育論と二世教育が分析される。二世教育の記述は、章構成の点から最も充実している。二世は、平時時には日米の「架け橋」になれと期待され、「日本人らしさ」を発揮してこそ米国民民としてアメリカにも貢献できると鼓舞される。これらの言説の中には、現代の国際化や多文化共生の議論と酷似しているものがある。国際情勢の変化によって、「架け橋」言説がいかに撤取されるものなのか、本書からは現代に通じる教訓が読み取れる。その意味で、本書は時代性をも越えて、われわれに貴重な示唆を与えてくれる。

野入直美 (琉球大学助教授)

ない。「商品史」という共通の視角のもと、技術史、生活史、企業者史などの分析枠組を活かしてランドマーク商品の多面性が論じられている。

また、自動車为例にランドマーク商品が持つ負の側面について論じた章もあり興味深い。この章はメディアあり、消費社会論、カルチュラル・スタディーズなどの知見をふまえたものである。私が冒頭で引用した携帯電話と自動車の同時使用がもたらす意味がここで示されている。ランドマーク商品が消費社会に影響を及ぼす目に見えないパワーが分析されており、俗な表現となるが、この種の商品が持つ怖いもの見たさとも言える吸引力を認識させられる。

本書で取り上げられた商品は限られており、個別商品を考察する余地はまだ残されているだろう。私自身は、個別商品の研究成果が蓄積され、ランドマーク商品のある局面が、操作可能な概念によって規定される可能性に関心と期待を抱いている。

大原悟務 (大学商学部専任講師)



松柏社 2,520円(税込)

イギリスの道

山本 睦 (天学言語文化教育研究センター助教) 著

言語的要素が含まれているものに限らず、何らかのメッセー
ジ性や意味を帯びたものは全て
「テキスト」と解釈しうるの
はなからうか。そして、「メッ
セージ」や「意味」という表現
は、「記号」と言い換えること
もできる。著者は、大学院時代
をイギリスで過ごした。その間
に撮影された「道」の写真を主
なテキストとして、読者は著者
と共にそれらの風景の中に落ち
ている様々な記号を拾い一つ、
時には楽しい寄り道をしながら
、美しいイギリスを旅するの
である。

例えば、はげ山に続く一本の
小さな道があつて、その両側に
広がる緑の草地で羊が呑気そう

に草を食べている。「はげ山」
という記号は、紀元前3000
年頃に始まるイギリスでの伐採
の歴史を雄弁に物語っている。
また、著者がかつて学生とし
て生活していた中世からの大学
町ケンブリッジでは、コレッジ
の周りの小道にハーブの群れが
育っている。この小さな記号か
ら、コレッジは学問の場である
のみならず、一種の『生活共同
体』としての大学であったこと
を読み取ることが出来る。

さらに、道は陸路ばかりでは
ない。島国であるイギリスでは
「水の道」の持つ意味は重要で、
キリスト教も「海」という「水
の道」を通じてやってきた。時
を同じくして、日本に仏教が伝
わったということも暗示的であ
る。

このように記号を拾っていく
と、その場所の歴史や生活、文
化を読み解くことができる。道
は単なる通過点ではなく、楽し
むべきものであることを本書は
教えてくれた。

平弥悠紀 (天学留学生別科助教)



世界思想社 1,680円(税込)

現代日本の消費空間

関口英里 (女子大学文学部助教) 著

本書は、日本の消費社会が成
熟期を迎え、いわゆるポストモ
ダンと呼ばれる文化状況が出現
する1980年代以降に焦点を
据え、筆者が「文化装置」と名
づける多様な消費空間の分析を
通じて、現代日本社会の消費メ
カニズムを解明しようとする斬
新な試みである。

本書の第一の独創は、「文化装
置」という概念である。筆者に
よれば、文化装置とは何らかの
文化的メッセーを受信・発信
・媒介する社会的なメディア
であり、そこには様々な「仕掛
け」が隠されている。本書で扱
われる文化装置は、クリスマス、

バレンタインデー、ハロウィン、
東京デイズ、ニールランド、百貨店
屋上、ホテル、コンビニ、携帯
電話、インターネットなど、今
やわれわれの日常の風景と化し
たものばかりである。

こうした文化装置の多くは戦
後圧倒的な影響を及ぼしたアメ
リカ文化を反映しているが、筆
者はここに「ジャパナイゼーシ
ョン」という概念を新たに導入
する。すなわちアメリカ文化を
受容しつつそれを再構築し、日
本独自の消費文化を生み出して
いくメカニズムである。こうし
た観点から、筆者は文化装置に
隠された仕掛けを鮮やかに読み
解いていく。

本研究は筆者の浩瀚な博士学
位論文を出発点としているが、
本書ではさらに新しい知見が加
えられており、限られた紙数と
はいえ、これまでの研究成果が
見事に盛り込まれている。専門
書としても入門書としても広く
推薦したい一冊である。

北村 卓 (天学大学院文化研究科教授)



ミネルヴァ書房 4,200円(税込)

現代法理論論争

R・ドゥオーキン対法実証主義
深田三徳 (天学司法研究科教授) 著

本書は、現代法理論論争の検
討を通じて、今日の法理論の直
面する問題を提示し、さらに法
理論の在るべき方向を模索する
ものである。とくに、「法とは
何か」という問題について、自
然法論と法実証主義の対立をふ
まえて検討が進められている。

まずは、「法とは何か」とい
う問題が、法実証主義者のH・
L・A・ハートと、法実証主義
に批判的なR・ドゥオーキンの
論争に即して検討される。特徴
的なのは、ドゥオーキンの見解
が、法理学、権利論、解釈的法
理論といった多方面から検討さ
れている点である。日本でもド

ゥオーキンに関する研究は多い
が、彼の見解を包括的に検討し
た本書の意義は極めて大きい。
続いて、法実証主義の新潮流
が検討される。厳格な法実証主
義、ソフトな法実証主義、規範
的法実証主義といった立場が手
際よく整理されている。さらに、
著者自身の法理論も提示されて
いる。すなわち著者は、分析的
法実証主義とソフトな法実証主
義の立場から、実定法一元論と
「法と道徳分離論」をとる。し
たがって法と道徳・正義の間に
必然的関連はないと考えてい
る。しかし、正義原理の探求や
その観点からなされる「在るべ
き法」の研究については、むしろ
積極的に支持するのである。

著者は、以上を検討した上で、
日本における法思想・法理論の
展開も論じている。その意味で、
本書は法理論の研究者のみなら
ず、日本の法理学を学ぶ学生に
とつても示唆的である。ぜひこ
一読をお薦めしたい。

濱 真一郎 (天学法学部助教)



ナカニシヤ出版 4,575円(税込)

アジアの教科書に見る子ども

塘利枝子 (女子大学現代社会学部助教) 著

本書は、アジア6カ国(日本、
韓国、台湾、中国、タイ、バン
グラデシュ)の小学校・国語の
教科書を用いて、そこに描かれ
た内容から各国の理想の家族像
(第3章)、親役割と育児行動に
関する性役割(第4章)、「いい
子」像(第5章)の国・地域別
の相違について、国際比較と時
系列的な比較(1960年代と
2000年)を通じて明らかに
している。

教科書の内容分析から浮かび
上がる理想の家族像や子ども像
は国によって実に多様で、興味
深い。たとえば、韓国の教科書
では「娘」より「息子」の登場

する頻度が高く、イエ(韓国で
は「チブ」という)の相続を背
景として、男子出産を期待する
伝統的な価値観が看取される
という。教科書の内容から明らか
にされる各国の人々の行動様式
や意識・規範は、時代(歴史的
な文脈)や文化・社会の状況に
よって規定されている。また、
得られた知見は各国の社会・文
化の諸相とともに、自国の文化
のあり方や子ども観を相対化す
る視点を提供してくれる。

特に昨今、竹島や尖閣諸島の
領有権をめぐる問題や首相の靖
国神社参拝問題を契機に、中国
や韓国では反日運動が起きてお
り、その背景を両国の教育のあ
り方に求める動きがある。本書
で用いられた「比較教科書学」
ともいうべきユニークな研究手
法は、狭義の教育や子ども問題
のみならず、様々な社会問題の
背景の理解に役立つことだろ
う。

小針 誠 (女子大学現代社会学部専任講師)